友達のお姉ちゃんが脱毛サロンをやっていて、施術してもらってる途中に勃起してしまった話

大学生になったタカヒロは、新しい生活に少しずつ慣れてきていた。キャンパスでの講義も、サークル活動も、そして何より、大学で出会った友人たちとの時間が楽しかった。

特に仲が良かったのが、同じ学部のユウタだ。ユウタは明るくてノリがよく、タカヒロもすぐに打ち解けた。ある日、二人でキャンパスのベンチに座って話していたとき、ユウタがふとこんなことを口にした。

「そういえばさ、俺の姉ちゃん、脱毛サロンやってんだよ」

「え、お姉さん？」

「うん。結構人気あるらしい。でさ、タカヒロって今、脱毛したくない？なんか前に言ってたじゃん」

確かにタカヒロは、少し脱毛に興味を持っていた。特に下の方をきれいにしておきたいと思っていたが、サロンに行くとなると料金も高いし、恥ずかしいしで、なかなか踏み切れずにいた。

「まあ……やってみたい気持ちはあるけど、高いしな」

「だったらちょうどいいじゃん。姉ちゃん、友達の紹介ならタダでやってあげるって言ってる

んだ。俺の友達なら良いって。連れてこいってさ」

タダ、という言葉にタカヒロは目を輝かせた。ユウタも「本当にいいのかよ」と笑いながら、後日、姉のサロンに連絡を取ってくれた。

こうして、週末の午後。タカヒロはユウタに連れられて、住宅街の一角にある小さな脱毛サロンを訪れた。看板には「Minami Beauty」と控えめに書かれている。ドアを開けると、清潔で落ち着いた内装が広がっていた。受付に立っていたのが、ユウタのお姉ちゃん・ミナミさんだった。

黒髪をきれいにまとめ、白い制服に身を包んだ27歳の女性。穏やかな笑顔で二人を迎え

てくれた。ユウタに似た目元をしていて、落ち着いた雰囲気がある。

「ユウタのお友達ね。タカヒロくん、よろしく。今日はVIO脱毛希望って聞いたけど、大丈夫？」

「は、はい……お願いします」

タカヒロは少し声が上ずった。VIO——デリケートゾーンの脱毛だ。ユウタが事前に伝えてくれていたらしい。

ミナミさんは優しく説明してくれた。「初めてなら緊張すると思うけど、私、この仕事長いから心配しないで。完全個室だし、誰にも見られないから」

更衣室で下着だけになったタカヒロは、用意されたガウンを羽織り、施術室に入った。ベッ

ドに仰向けになると、ミナミさんがカーテンを閉めて入ってくる。

「じゃあ、ガウンを少しめくってね。ここから下は全部出してもらうから」